

# 1 『貞観政要』 ～帝王学の指南書～

- 【編著者】 吳兢（編）、山本惟孝（校訂）  
【出版者】 須原屋茂兵衛、敦賀屋九兵衛、総田屋平右衛門、帯屋伊兵衛  
【出版年】 文政6年（1823）



本書は、『貞観政要』の和刻本（中国などの書を日本で覆刻した本）です。

『貞観政要』は、唐の歴史家である吳兢（670～749）が編纂した、唐の2代皇帝太宗（在位626～649）の言行録です。君主はどうあるべきかを、太宗と重臣たちとの問答形式で記し、古くから帝王学の指南書として広く読まれました。徳川家康の愛読書の一つとしても知られ、江戸時代、治者としての教養を修める藩校教育において重要な教科書として全国に普及しました。

また、本書は「南紀学習館蔵版」と呼ばれる版本で、紀州藩の藩校学習館の所蔵本を学習館4代督学（学長）の山本惟孝（山本樂所、1764～1841）らが校訂し、文政6年（1823）に和歌山で出版されたものです。全国の諸藩校の蔵書の中でも、この「南紀学習館蔵版」が最も広く使用されていたといわれています。

出版者は、当時和歌山を代表する書肆（本屋）であった総田屋平右衛門と帯屋伊兵衛です。帯屋伊兵衛は、『紀伊国名所図会』の刊行を始めた書肆で、現在も帯伊書店（和歌山市）として営業を続けています。

## 2 『<sup>おちば</sup>落葉の錦<sup>にしき</sup>』 ～本居宣長・大平の遺墨カタログ～

【編著者】 <sup>もと おりうちと</sup>本居内遠（編）  
【出版者】 阪本屋喜一郎、阪本屋大二郎  
【出版年】 嘉永4年（1851）



本書は、嘉永4年（1851）9月23日、24日の両日、吹上寺（和歌山本居家の菩提寺）で開かれた遺墨<sup>いぼく</sup>展の図録です。『古事記伝』を著して国学を大成し、紀州藩に仕えた本居宣長<sup>もと おりのりなが</sup>（1730～1801）とその養子<sup>もと おりのおおひら</sup>本居大平（1756～1833）の書などが模写または縮図にして掲載されています。上巻には宣長、下巻には大平の作品が収録されています。

編者の本居内遠<sup>もと おりうちと</sup>（1792～1855）は、大平の養子となり家督を継ぎ、11代紀州藩主徳川斉順<sup>なり</sup>に仕えた国学者です。内遠は、嘉永3年（1850）春、宣長の五十年霊祭<sup>れいさい</sup>に際して京都で行われた遺墨展に注目し、和歌山においても京都以上のものを催す企画をしました。そして翌4年（1851）秋、和歌山の吹上寺にて宣長・大平などの遺墨を中心とする大がかりな展覧会を開きました。

当日は宣長・大平のほか、契沖<sup>けいちゆう</sup>・荷田春満<sup>かたのあづま</sup>・賀茂真淵<sup>かものまぶち</sup>などの遺墨を展示しました。出品者は、本居家のほか紀伊の国造家など多岐にわたっていたようです。

出版者の阪本屋喜一郎・大二郎は兄弟で、江戸後期に和歌山城下随一の出版数を誇った書肆<sup>しょし</sup>（本屋）です。写真やコピー機のない時代、すべて手作業で模写し彫工した当時の職人の技術には驚くべきものがあります。

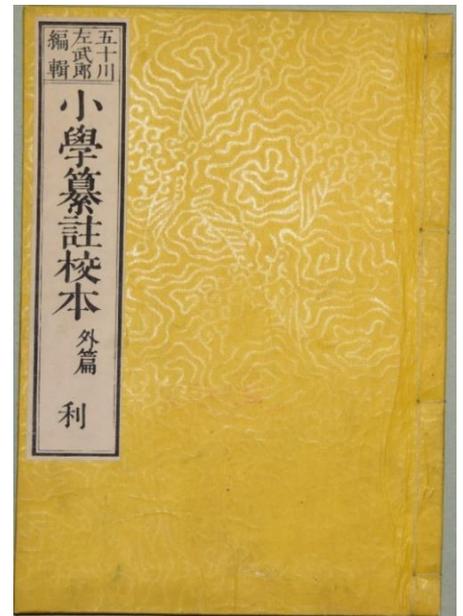
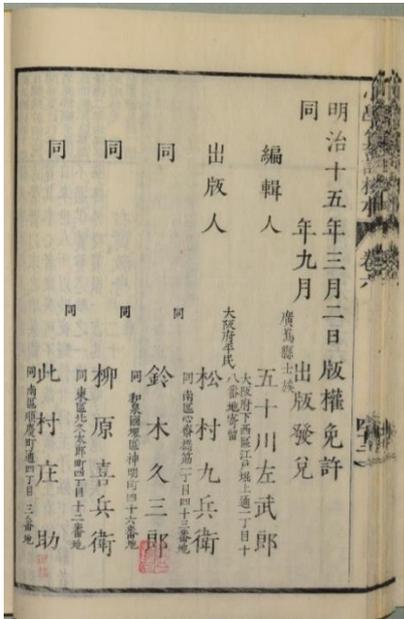
本書には、「御風楼主人<sup>ごふうろうしゆじん</sup>」という蔵書印が押されており、濱口容所<sup>はまぐちゆうしょ</sup>の蔵書であったことがわかります。

1 故人が書き残した書画。  
2 仏教の法要にあたる神道の行事。

3 『小学纂註校本』

～初学者のための道德・作法の書～

【編著者】 高愈（纂註）、五十川左武郎（校訂）  
【出版者】 松村九兵衛、鈴木久三郎、柳原喜兵衛、此村庄助  
【出版年】 明治15年（1882）



本書は、中国清の高愈が著した『小学纂註』（『小学』という経書の注釈本）を、広島県の五十川左武郎が校訂し、明治15年（1882）に出版した和刻本です。

『小学』は、中国宋の朱熹（朱子学の祖、1130～1200）の門人劉子澄が編纂した、儒学の入門書です。立教・明倫・敬身・稽古・嘉言・善行の全6篇からなり、1187年に成立しました。

内容は、『礼記』、『論語』などの経典から、日常の礼儀作法や格言、善行など、マナーや倫理に関わる部分をピックアップして編集したものです。呼ばれたらきちんと返事をする、道の真ん中を歩かないなど、現代にもつながる事柄がたくさんあり、子供の教育書としての内容を兼ね備えています。

中国においては、明・清時代に『小学』の注釈書が多く出ていますが、その中で朱熹の本意を最もよく会得表現しているとされるのが、この『小学纂註』です。日本では、子供の教育書として用いられ、江戸時代に昌平黌や諸藩校において、初学者用の教科書として広く採用されました。明治期に入っても漢学の素養は重視されたため、本書のような校本が各地で出版されました。

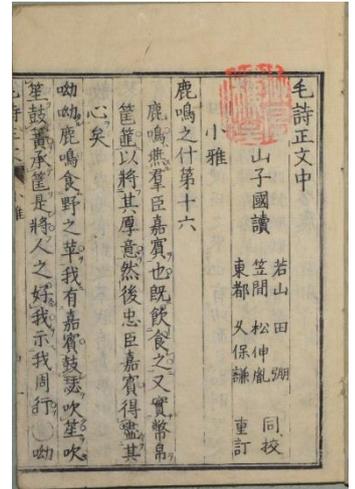
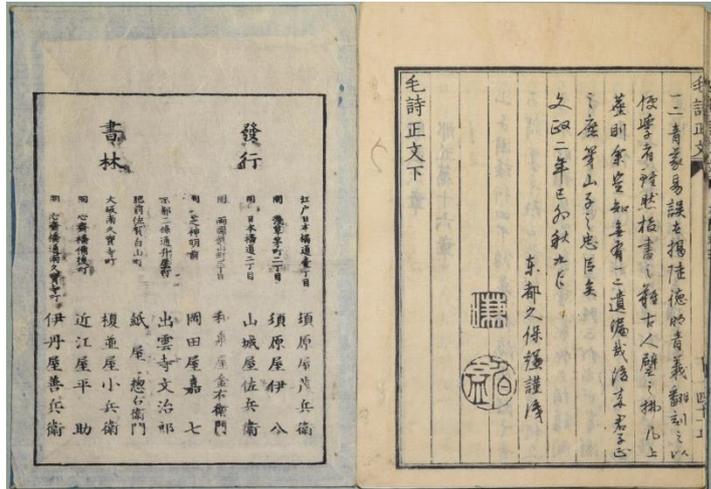
本書には、「御風楼主人」という蔵書印が押されており、濱口容所の蔵書であったことがわかります。

1 江戸幕府直轄の学校。昌平坂学問所ともいう。

4 『毛詩正文』

～『詩経』の訓読用テキスト～

- 【編著者】 山子（国読）、田弼（校訂）、松伸胤（校訂）、久保謙（重訂）
- 【出版者】 須原屋茂兵衛、須原屋伊八、山城屋佐兵衛、和泉屋金右衛門、岡田屋嘉七、出雲寺文治郎、紙屋惣右衛門、榎並屋小兵衛、近江屋平助、伊丹屋善兵衛
- 【出版年】 文政2年（1819）



本書は、中国の古典『毛詩（詩経）』に、江戸時代中期の儒学者片山兼山（1730-1782）が訓点（返り点・送り仮名など）を施した和刻本です。片山兼山の入門は山子学とよばれ、彼が諸本に施した訓点を山子点といいます。

『毛詩』は、儒教の經典である四書五經の一つ『詩経』の別称で、古代中国の西周から春秋までの歌謡 305 篇を集めた中国最古の詩集です。

嘉永5年（1852）に「稽古場」が創立して以来、耐久社では、武術とともに漢学の教育が重視されてきました。明治3年（1870）に制定された耐久社の「学則」（耐久高校所蔵）には、「漢学寮課業書目」として、『論語』、『資治通鑑』などと並び、『毛詩』が定められており、当時の学生の必読書でした。

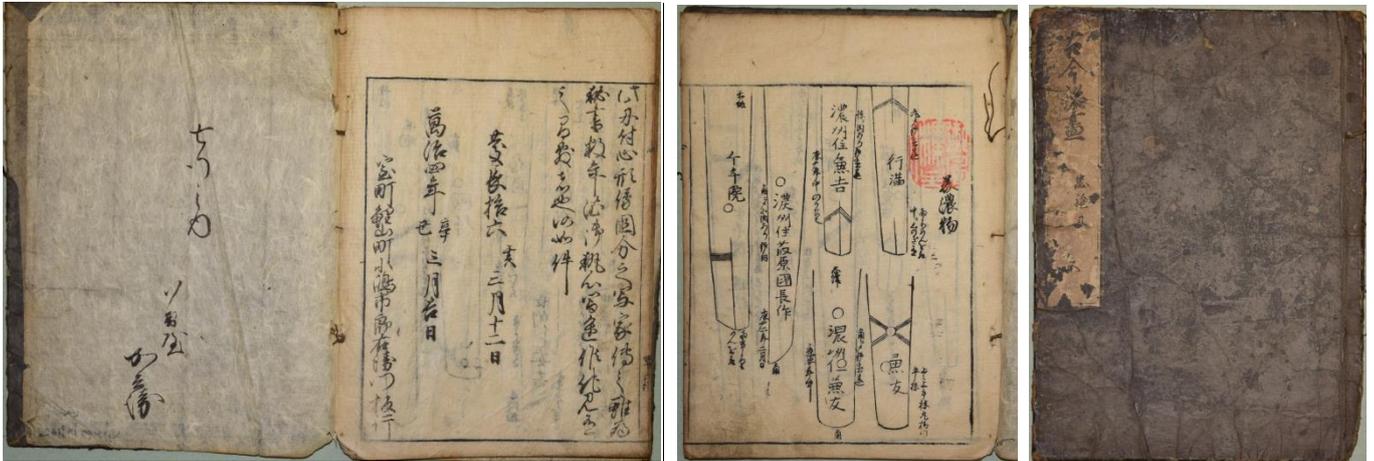
出版者の一人に名を連ねる須原屋茂兵衛は、江戸初期に紀伊国有田郡栖原村（現湯浅町栖原）から江戸に出て開業した書物問屋です。武鑑類や江戸図類の版權を握り、江戸出版業界最大手の地位を築き上げました。

本書には、「御風楼主人」という蔵書印が押されているとともに、裏表紙には濱口容所の幼名「濱口勝之助」と記されており、容所が幼少期から所有した書物であったと考えられます。

5 『古今銘尽』

～ベストセラーとなった刀剣鑑定書～

- 【編著者】 不詳
- 【出版者】 小嶋市郎右衛門
- 【出版年】 万治4年（1661）



本書は、万治4年（1661）に出版された、刀剣書『古今銘尽』の初版本です。刀剣研師として著名な竹屋系の刀剣鑑定に関する秘伝書をまとめ、万治4年（1661）に京都室町鯉山町の書肆（本屋）である小嶋市郎右衛門が刊行したものです。

なお、奥書に「慶長拾六亥三月十二日」とありますが、これは、この本の元となった秘伝書が師匠から弟子に交付された日付であり、出版年月日を示すものではありません。

全7巻からなり、第1巻「系図秘談抄」には刀鍛冶の系図、第2巻「秘伝抄」には、諸国の刀鍛冶の位列（等級）・年代・居住地などが掲載されています。第3・4巻「目利」では、それぞれの刀剣の来歴や特徴を記し、目利きのポイントが示されています。第5巻「忠鑢刃」、第6・7巻「心形像銘形」は押形<sup>おしがた</sup>をまとめたもので、刀の各部に刻まれた銘文や模様が忠実に再現されており、名刀の意匠を手軽に楽しむことができます。

『古今銘尽』は幕末に至るまで何度も版を重ねましたが、万治4年（1661）の初版本は他機関での所蔵も少なく貴重なものです。

本書には「御風楼主人」という蔵書印が押されており、濱口容所の蔵書であったことがわかります。

1 刀剣の姿形を墨などを使って紙に写し取ったもの。

## ◎Web 公開資料の解説

### \* 参考文献

- ・ 神田信夫・山根幸夫編『中国史籍解題辞典』燎原書店、1989年
- ・ 中澤伸弘・宮崎和廣編『宣長・鈴屋関係資料集』資料篇二、クレス出版、2012年
- ・ 宇野精一『新釈漢文大系3 小学』明治書院、1965年
- ・ 小笠原信夫『刀鍛冶考—その系譜と美の表現—』雄山閣、2019年
- ・ 得能一男『刀剣書事典』宮帯出版社、2016年
- ・ 和歌山市立博物館編『城下町和歌山の本屋さん—「紀伊国名所図会」を中心に—』和歌山市立博物館、2003年
- ・ 横田冬彦編『シリーズ〈本の文化史〉4 出版と流通』平凡社、2016年
- ・ 須山高明「近世紀州書肆出版物編年目録稿（上）」（『和歌山県立博物館研究紀要 第5号』和歌山県立博物館、2000年）
- ・ 耐久校史編纂委員会編『耐久校史』耐久高校同窓会、1973年
- ・ 和歌山県史編さん委員会編『和歌山県史 近世』和歌山県、1990年
- ・ 和歌山市史編纂委員会編『和歌山市史 第2巻 近世』和歌山市、1989年
- ・ 和歌山県教育史編纂委員会編『和歌山県教育史 第1巻 通史編1』和歌山県教育委員会、2007年
- ・ 広川町誌編纂委員会編『広川町誌 上巻・下巻』広川町、1974年
- ・ 湯浅町誌編纂委員会編『湯浅町誌』湯浅町役場、1967年
- ・ 国史大辞典編纂委員会編『国史大辞典』吉川弘文館、1979～1997年